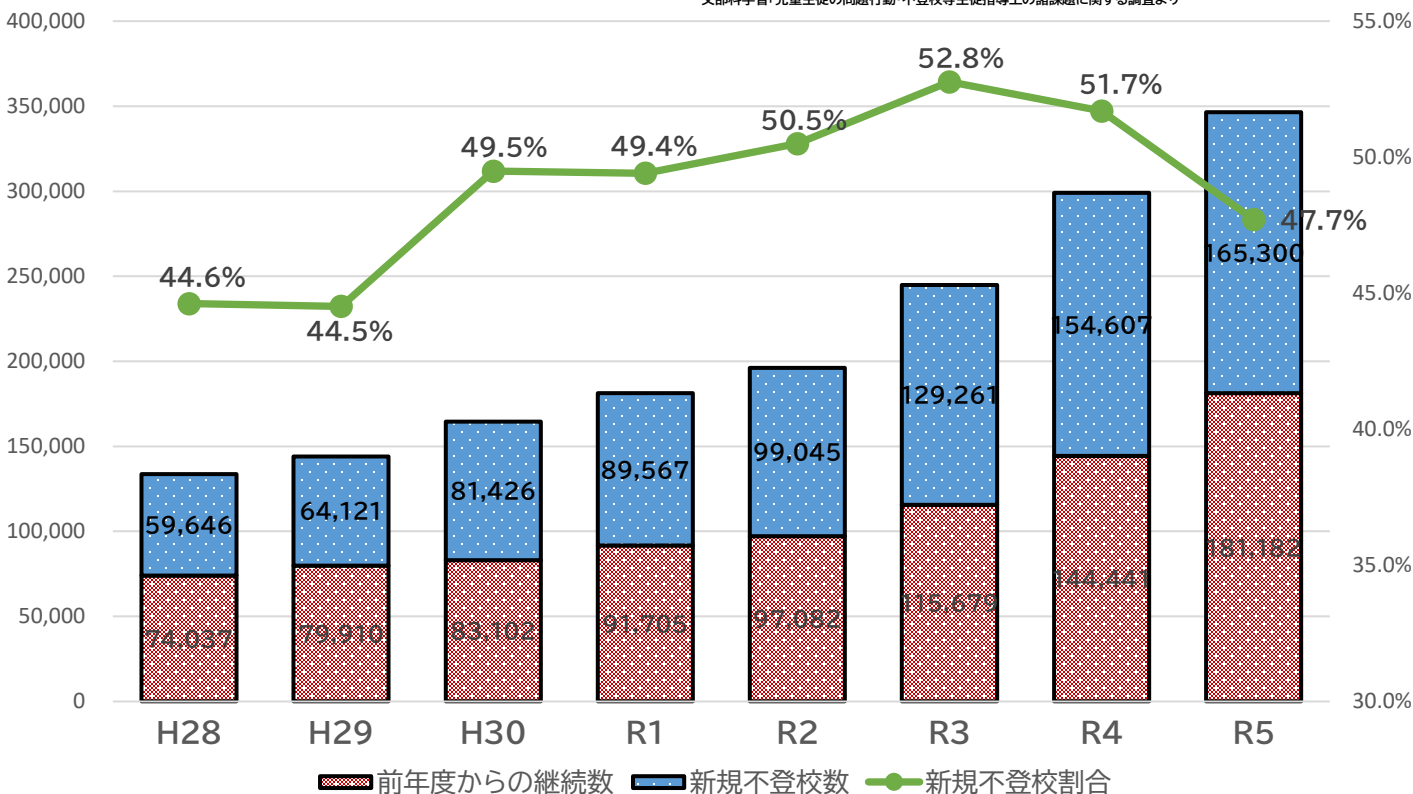


不登校児童生徒数に占める新規者の割合の推移

(全国国公立小・中学校)

文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査より

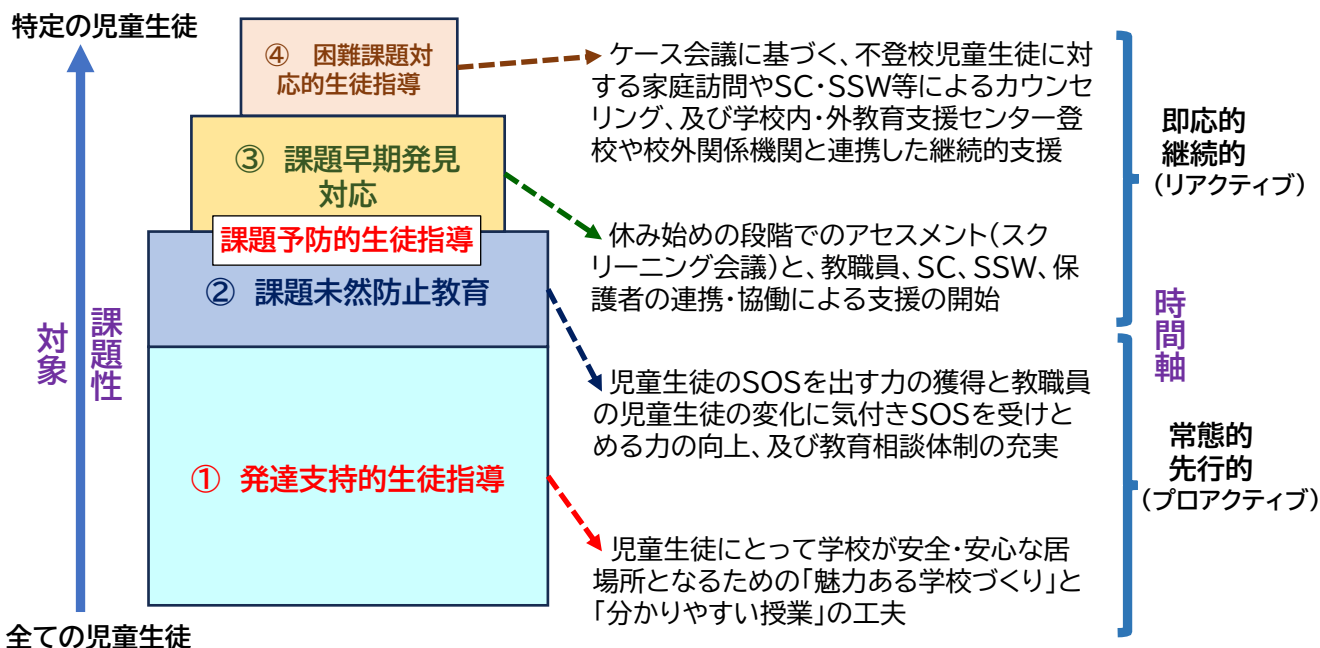


不登校児童生徒の約半数が「新規不登校※」

※不登校総数を「不登校の状態が前年度から継続している児童生徒数」を引いたもの。
ただし、小学校1年生は前年度の状況が不明のため、全員が新規不登校となる。

文部科学省 国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり調査研究事業(参照1)」において、「①発達指示的生徒指導」である「居場所づくり」や、「絆(きずな)づくり」を中心とした全ての児童生徒を対象とした未然防止の取組を進めた結果、「新たな不登校児童生徒」の出現を抑制し、学校単位だけでなく取り組んだ自治体単位で不登校生徒数の減少が見られたという成果が得られています。

不登校対応の重層的支援構造 【文部科学省 生徒指導提要改訂版から抜粋】



魅力ある学校づくり調査研究事業とは

■中学校区を単位とした指定地域において、校区内の中学校・小学校が互いに連携し、全教職員の共通理解・共通実践により、すべての児童生徒を対象として「魅力ある学校づくり」を目指し、実践的な取組を行う。

■平成22年度～令和4年度まで実施

◆本事業において学校で取り組むことは、自立支援、初期対応ではなく、未然防止の取組に特化することとする。

→ 不登校の増加に歯止めをかけるために、以下のような未然防止の視点が鍵となると考えられる。

- ・ すべての子どもたちを対象とした「居場所づくり」,
「絆(きずな)づくり」
- ・ 教員が本来すべき仕事(集団指導)に、より力を発揮できるようにする。
- ・ 必要以上に個別支援を増やさない。
- ・ 初期対応の取組と明確に区別する。

◆効果検証の指標として、不登校の「新規数」を用いる。

魅力ある学校づくりの主体は

第5章 学校等における取組

1「不登校が生じないような学校づくり等」

(1)魅力あるよりよい学校づくり

児童生徒にとって学校が、

自己が大事にされているか？

心の居場所となっているか？

きずなづくりの場となっているか？

大切な意味のある場となっているか？

教職員が自らの教育活動を問い直すこと

調査研究事業の趣旨（概要）

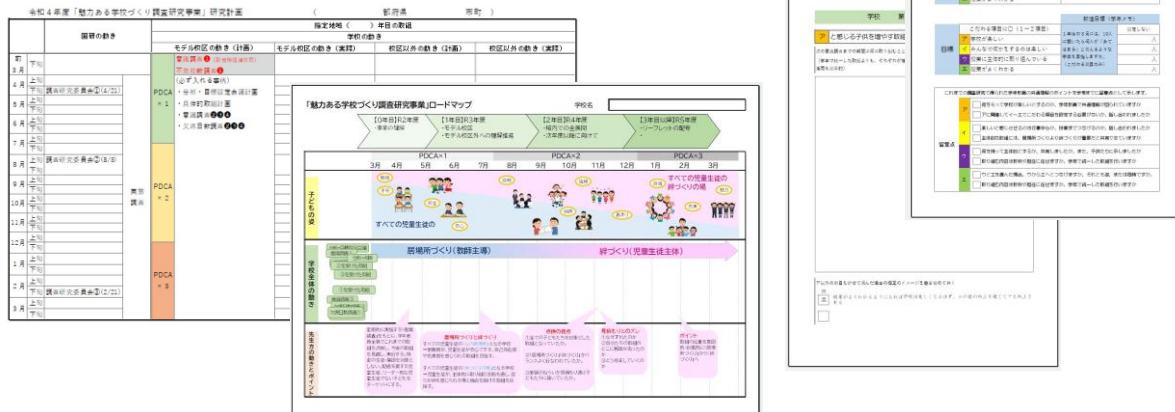
各地域における不登校の未然防止、初期対応、自立支援の取組のうち、学校の実情に応じた不登校の未然防止対策の充実を図るための教育委員会が果たすべき役割に関する調査研究

委託地域数 令和3年度：15地域・令和4年度：14地域

調査研究の主な成果

- ① PDCAサイクルに基づく生徒指導マネジメントを実行する観点から、組織的・計画的な不登校対策を実施するための「ロードマップ」様式等を開発

<作成した様式の例>



調査研究の主な成果

- ② 不登校対策の目的の明確化、特に全ての児童生徒を対象とした「新たな不登校を生まない」対策を実施することの効果の提示

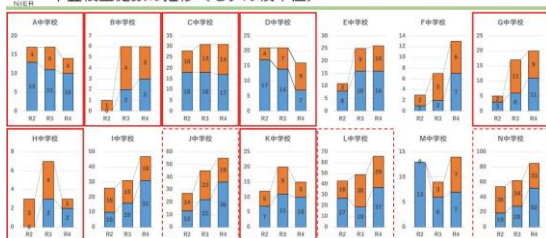
全国的に「年度内に新たに不登校になる児童生徒」が増加している中、「居場所づくり」「絆（きずな）づくり」を中心とした全ての児童生徒を対象とした未然防止の取組を進めた結果、「新たな不登校児童生徒」の出現を抑制し、学校単位だけでなく取り組んだ自治体単位で不登校生徒数の減少が見られた。

不登校生徒数の推移（全国・全委託市町内中学校・全モデル中学校）



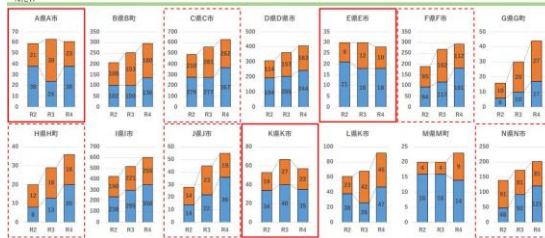
魅力事業の事業委託を行った2年間（R3～4）において、不登校生徒数は増加しているものの新規割合は減少（全国以下）

不登校生徒数の推移（モデル校単位）



不登校生徒数を減少又は維持：7/14校・新規者数を減少又は維持：8/14校

不登校生徒数の推移（委託市町単位）



不登校生徒数を減少：3/14市町・新規者数を減少又は維持：7/14市町

効果的な取組に共通するもの

中学校区全体での取組

- 推進委員会や主任者会議など域内共通理解の場の定期開催
- 学年団会等、教員が主体となった分析・計画立案
- 重点項目の設定（校内・校区）による取組の重点化
- 「引継ぎシート」の活用による実践内容の引き継ぎ
- 教育委員会の支援（場の設定・会議への定期参加・共通構想図）

9年間を見通した実践意図の醸成・未然防止の取組への価値付け

「児童生徒の意識調査」の活用

- 「PDCAシート」による点検・改善サイクルの確立
- 学年団会等、教員が主体となった分析・計画立案
- 重点項目の設定（校内・校区）による取組の重点化
- 分析の視点（児童生徒と教職員の意識のズレの検討）の明確化
- 1人1台端末の活用等、Webアンケートによる効率化

児童生徒を中心とした教育活動・PDCAサイクルの確立

すべての教育活動で「居場所づくり・絆づくり」を実践

- 自校の強み（「特別活動」など）の活用・授業改善

学習指導と生徒指導の一体化・日常的な生徒指導の実践

＝「生徒指導提要（改訂版）」の趣旨と致致

効果的な実践の例（抜粋）

（例①）生徒の主体性を重視した行事（特別活動）改善（児童生徒中心の学校づくり）

意識調査「みんなで何かをするのは楽しい」が高いという自校の強みを生かし、文化祭、球技大会などのあらゆる学校行事や活動での居場所づくりと絆づくりを重視した取組

「居場所づくり」の例

- ・ 合唱コンクールでの学級目標の設定
- ・ 練習ルールづくり
- ・ 役割の明確化
- ・ 生徒の記録を活用した振り返り
- ・ 練習の機嫌の通信、HP等での発信
- ・ 本日のMVP
- ・ 苦手意識のある生徒と得意な子のペア練習

「絆づくり」の例

- ・ パートリーダーを中心とした練習
- ・ 合唱コンクールノートを作成し、全員で取り組む
- ・ リーダー会の開催

- <効果>
- > 生徒主体の取組による行事の活性化と業務改善
 - > 友達の新たな一面の発見
 - > 集団で取り組むことの良さや楽しさの実感
 - > 自己有用感、自己肯定感の高まり
 - > クラス、学校の一体感の醸成 など

（例②）校則の見直し（児童生徒中心の学校づくり）

生徒会役員の公約「校則の見直しを行いたい」を発端とした取組

- ・ 道徳の時間を活用したルールへの大切さの学習
- ・ 学級会での話し合い
- ・ 学年パネルディスカッション、全校パネルディスカッションを通じた協議

- <効果>
- > ルールに縛られるだけではなく、自らルールを守っていく意識の醸成
 - > 同じ生徒でも様々な考え方があることなど、多様性を認め合う集団づくり など

（例③）生徒指導の機能を生かした授業改善（学習指導と生徒指導の一体化）

授業に内在化した積極的な生徒指導を日常的に実践するための授業改善の取組

- ・ 生徒指導の機能（現行『提要』では実践上の焦点）を活かした授業づくりのための職員研修の実施
- ・ 学習指導案の指導上の留意点に、生徒指導の焦点を明記して授業を行うなど、学習指導と生徒指導の一体化を進める授業づくり 等

- <効果>
- > 子供同士の教え合いや学び合いなど、学習指導要領が目指す「主体的・対話的・深い学び」のある授業の増加
 - > 「授業がよく分かる」「授業に主体的に取り組んでいる」の回答割合の増加
 - > 取組を通じた共感的な人間関係の促進と児童生徒一人一人の自己有用感、自己肯定感の向上 など

効果的な実践の例（抜粋）

（例④）学級活動の活性化と日常の教科指導の見直し（学習指導と生徒指導の一体化）

長年取り組んできた学級活動を中学校区すべての学校で行い、児童生徒の主体的に取り組む力を伸ばすとともに、ふだんの授業にも児童生徒の話し合う場を多く設定するなどの授業改善への取組

- ・ 「学級会の進め方」の見直しと共通化
- ・ ふだんの授業でも児童生徒が主体的に話し合う場を意識的に取り入れた授業づくり

- <効果>
- > 自分たちの学校生活を自分たちの力でより良くしたいという意識（自治的能力）の向上
 - > 「授業に主体的に取り組んでいる」「授業がよくわかる」と回答した児童生徒の増加 など

（例⑤）教育課程の見直し（働き方改革と生徒指導の充実）

生徒と向き合うための学校改善の取組

- ・ 登下校時間の見直し
- ・ 月1回の「○○の日」（午後の部活なし完全下校、会議・研修もなし）

- <効果>
- > 始業前の教職員同士の情報交換の時間確保
 - > 教職員の自発的な学び合い
 - > 教職員、生徒ともに自己決定の場の提供による時間の有効活用の意識が向上
 - > 自己指導能力の育成 など

（例⑥）中学校区としての実践を行うための体制づくり（チーム学校の推進）

各校に「魅力」担当者を位置付け、オンライン会議システムも活用しながら定期的な協議の場を設定するなど、学校の枠を超えた取組

- ・ 「子どもの意識調査」の結果を持ち寄り、各校の課題だけでなく9年間を見通した中学校区としての課題を設定して実践
- ・ 小中学校の接点期を意識した「のりしろ」の取組による中1ギャップの解消
- ・ 児童生徒の学びの連続性、不安感へ配慮した中1共通の「学習のきまり」の見直し

- <効果>
- > PDCAサイクルによる生徒指導マネジメントの意識の高まりと取組方法の確立
 - > 担当者を中心としたミドルアップダウンマネジメントによる職場の同僚性の高まり など

まとめ

様々な実践を通じて、教職員の生徒指導に対する意識が変化（未然防止の重要性への理解）し、行事・授業等への取組方が変化した結果、学校が児童生徒にとって魅力的な場となったことで改善につながった。今後も早期発見、個別支援の充実を図るとともに、改訂版『生徒指導提要』で示された発達支持的生徒指導による未然防止の取組についても充実させていくことが生徒指導上の諸課題の解決のために必須。

【欠席日数調査表】

「魅力ある学校づくり」～新規不登校未然防止のために～

新規不登校未然防止のために学校が取り組むことは、全ての児童生徒が学校に来ることを楽しいと感じ、学校を休みたいと思わせないような、日々の学校生活の充実です。そのためには、どの児童生徒も落ち着ける居場所づくり、全ての児童生徒が活躍できるような絆づくりのための場づくりが鍵となります。（国立教育政策研究所「生徒指導リーフLeaf.14 不登校の予防」より）。

そのために、下のグラフを活用し、新規不登校抑制のための取組を学校または学年にて実践した上で、下のグラフ結果や、「学校が楽しい」、「みんなで何かをするのは楽しい」、「みんなで主体的に取り組んでいる」、「授業がよく分かる」といった4つの視点を盛り込んだアンケート調査（いじめアンケート等の項目に入れて実施するのが好ましい）結果から、学校又は学年における取組を振り返り、改善した上で次の取組を実践していくことにつながるといった、PDCAサイクルが、新規不登校数の抑制やいじめの未然防止につながります。

詳細は、下記URLに掲載されている資料等を参照ください。

■岐阜県教育委員会学校安全課HP

<https://www.pref.gifu.lg.jp/kensei/ken-gaiyo/soshiki-annai/kyoiku-iinkai/gakko-anzen/miryokuarugakkoudukurijigyou.htm>

■国立教育政策研究所「生徒指導リーフ Leaf.22 不登校数を「継続数」と「新規数」とで考える 平成30年7月」

<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/index.html>

学校名	00
-----	----

	1 年生				4 年生				全校			
	10人				5人							
	前年度 不登校数	4～7月 10日以上	4～7月 20日以上	4～7月 30日以上	前年度 不登校数	4～7月 10日以上	4～7月 20日以上	4～7月 30日以上	前年度 不登校数	4～7月 10日以上	4～7月 20日以上	4～7月 30日以上
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2 年生				5 年生							
	10人				5人							
	前年度 不登校数	4～7月 10日以上	4～7月 20日以上	4～7月 30日以上	前年度 不登校数	4～7月 10日以上	4～7月 20日以上	4～7月 30日以上				
	0	0	0	0	0	0	0	0				
	3 年生				6 年生							
	10人				5人							
	前年度 不登校数	4～7月 10日以上	4～7月 20日以上	4～7月 30日以上	前年度 不登校数	4～7月 10日以上	4～7月 20日以上	4～7月 30日以上				
	0	0	0	0	0	0	0	0				

■ …前年度不登校児童生徒数

■ …前年度不登校児童生徒数

■ …継続長期欠席（不登校）児童生徒数

□ …新規長期欠席（不登校）児童生徒数

【魅力ある学校づくりの実施手順】

【手順 1】

- ・左のグラフから自校（学年）における傾向を把握する。
※（別添）「欠席日数調査票」活用ガイドを参照。

【手順 2】

- ・左のグラフから傾向を傾向を把握したら、自校（学年）におけるこれまでの取組を振り返り、成果と課題を明確にする。

【手順 3】（必須ではないが効果あり）

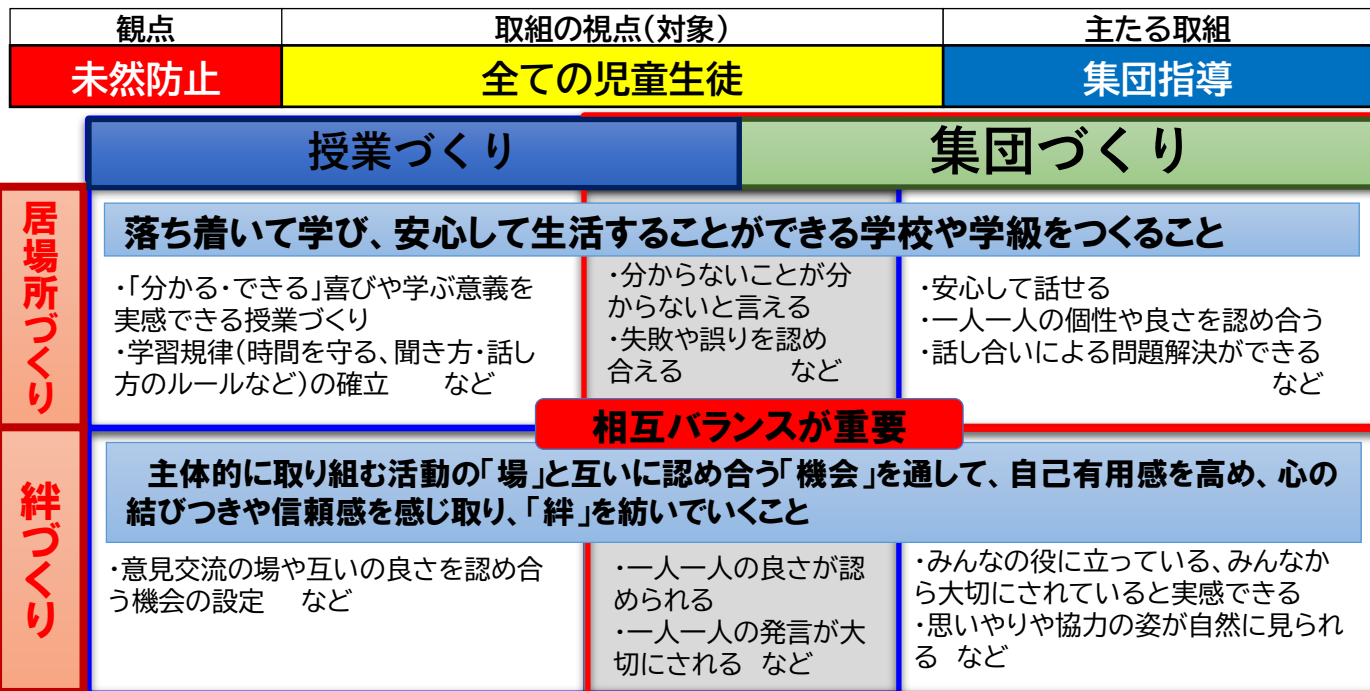
- ・自校（学年）の全児童生徒に対する意識調査を実施し、結果より、自校（学年）の取組の浸透度を把握する。
※この調査は、自校（学年）の取組と児童生徒との意識のズレを把握するために実施するものであるため、必須ではない。
※「学校が楽しい」、「みんなで何かをするのは楽しい」、「みんなで主体的に取り組んでいる」、「授業がよく分かる」といった4つの視点を盛り込んだアンケート調査は、いじめアンケート等の項目に入れて実施することが好ましい。

【手順 4】

- ・手順 2 と手順 3 の結果を踏まえ、自校（学年）における今後の取組を明らかにしていく。
※PDCAサイクル×3にて、取組改善を図る。
※自校や学年で協議する際に、備忘録の例を参考に記録をし、保存しておく。

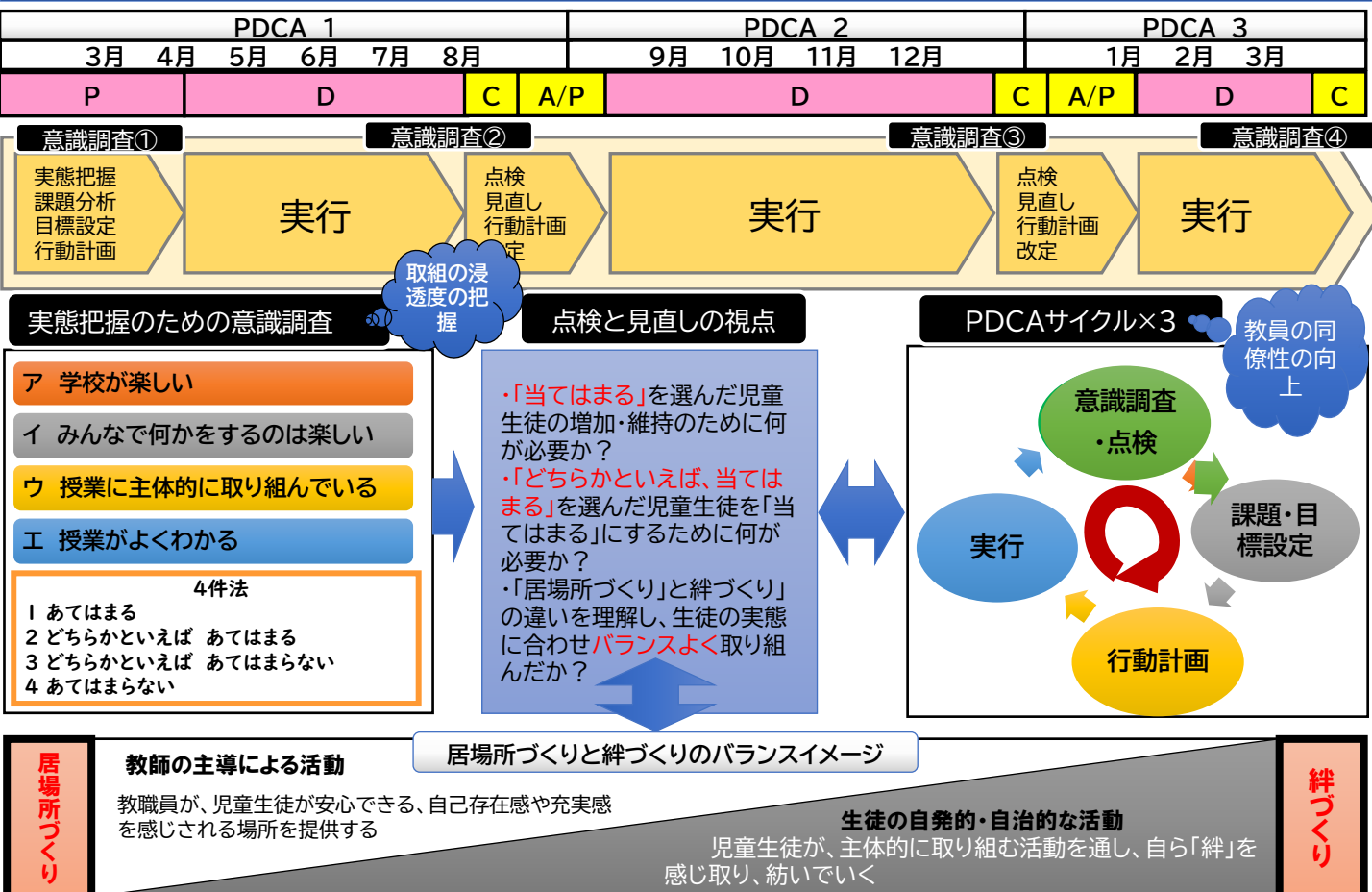
魅力ある学校づくり～不登校・いじめの未然防止のために～

不登校という事象に対して学校がまず取り組むべきことは、全ての児童生徒が学校に来ることを楽しいと感じ、学校を休みたいと思わせないような、日々の学校生活の充実です。どの児童生徒も落ち着ける場所をつくること(居場所づくり)、全ての児童生徒が活躍できる場面をつくること(絆づくりのための場づくり)が鍵になります。(国立教育政策研究所「生徒指導リーフLeaf.14 不登校の予防」より)



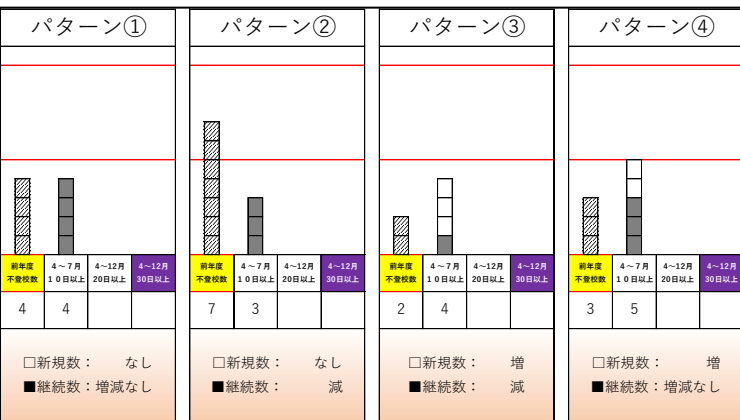
「欠席日数調査表」活用ガイド②

PDCA×3＝不登校・いじめの未然防止



グラフの活用手順

【手順①】グラフから自校の傾向をみる



「魅力ある学校づくり」の考え方①「新規数」と「継続数」

●不登校児童生徒の取組には、「新規数に着目した取組」と「継続数に着目した取組」があります。それぞれによって取組の対象や主たる取組が異なるため、対応するチーム学校の構成員（「教員のみ」、「教員＋専門職＋関係機関」）も変わります。

不登校数減少に向けて	取組の対象	主たる取組	2つの「チーム学校」
新規数を抑制する	前年度不登校ではなかったすべての生徒	集団指導	教員の同僚性をいかした「チーム学校」
継続数を減少させる	上記のうち兆しの見えた生徒	個別支援	教員に加え、SC、SSW 適指関係者等多職種による「チーム学校」
	前年度不登校であった生徒	個別支援	

【手順②】傾向から自校の取組を振り返る

パターン①	□新規数: なし ■継続数: 増減なし	授業や学級づくりを通して居場所が作られているとともに、欠席が続きそうな児童生徒への「初期対応」の取組が有効であると考えられます。取組の成果を校内で共有し、対応の継続をしていきましょう。
パターン②	□新規数: なし ■継続数: 減	授業や学級づくりを通して居場所が作られているとともに、欠席が続きそうな児童生徒への「初期対応」の取組が有効であると考えられます。取組のノウハウを校内で共有していきましょう。
パターン③	□新規数: 増 ■継続数: 減	欠席が続きそうな児童生徒への「初期対応」の取組について点検をしましょう。教職員の対応に加え専門家等の早期活用も検討をしましょう。
パターン④	□新規数: 増 ■継続数: 増減なし	欠席が続きそうな児童生徒への「初期対応」の取組について点検をしましょう。教職員の対応に加え専門家等の早期活用も検討をしましょう。

【手順③】調査から自校の取組の浸透度を把握する

●自校(学年)の全児童生徒に対する意識調査を実施し、結果より、自校(学年)の取組の浸透度を把握する。

※この調査は、自校(学年)の取組と児童生徒との意識のズレを把握するために実施するものであるため、必須ではないが効果はある。

※次の4つの視点を盛り込んだアンケート調査は、いじめアンケート等の項目に入れて実施することで、継続的な把握につながる。

「欠席日数調査表」活用ガイド④ 備忘録の例

学校 第 学年 記入者

鉛筆書き、ア～エの項目について、それぞれの「あてはまる」の割合を%で記入する。

「あてはまる」と回答した子供の割合

意識調査項目	前3月	7月	12月	3月
点検				
ア 学校が楽しい				
イ みんなで何かをするのは楽しい				
ウ 授業に主体的に取り組んでいる				
エ 授業がよくわかる				

こだわりの項目に○（1～2項目） 理由（学年メモ）

鉛筆書き、ア～エの項目のうち1～2項目を選んだ理由を書き留めておく。

数値目標（学年メモ）

鉛筆書き、設定しない場合は○をつける。

設定しない

設定する場合は、学年教員で協議し、その結果を10までの数値で記録する。（基本的には学年どまりの数値目標）

これまでの調査研究で得られた学年教員の共通理解のホ

ア □何をもって学校が楽しいとするのか、アに関連してイ～エでこだわりの項目を設定する必要はないが、話し合いましたか

イ □楽しいと感じさせるのは行事中心か、授業までつなげるのか、話し合いましたか

ウ □何を持って主体的とするのか、共有しましたが、また、子供たちに示しましたか

エ □ウとエを選んだ場合、ウからエへとつなげますが、それとも逆、または同時ですか。

エ □取り組む内容は教科や担任に任せますが、学年で統一した取組を行いますか

学校 第 学年 ～ 月の取組

イ と感じる子供を増やす取組の強化 に向けた 学年メモ

次の意識調査までにどの月のどんなことを強化するのか。（新たな取組よりも浸透度）

行事における「絆づくり」 授業における「絆づくり」

9月

10月

11月

12月

修学旅行

ペア学習

グループ学習

修学旅行報告集会

参考 「居場所づくり」と「絆づくり」

全ての児童生徒の「心の居場所」となる学校

【安心安全な学校づくり】

児童生徒が、主体的に取り組む活動を通し、自らが「絆」を感じ取り、紡いでいく【場と機会の設定】